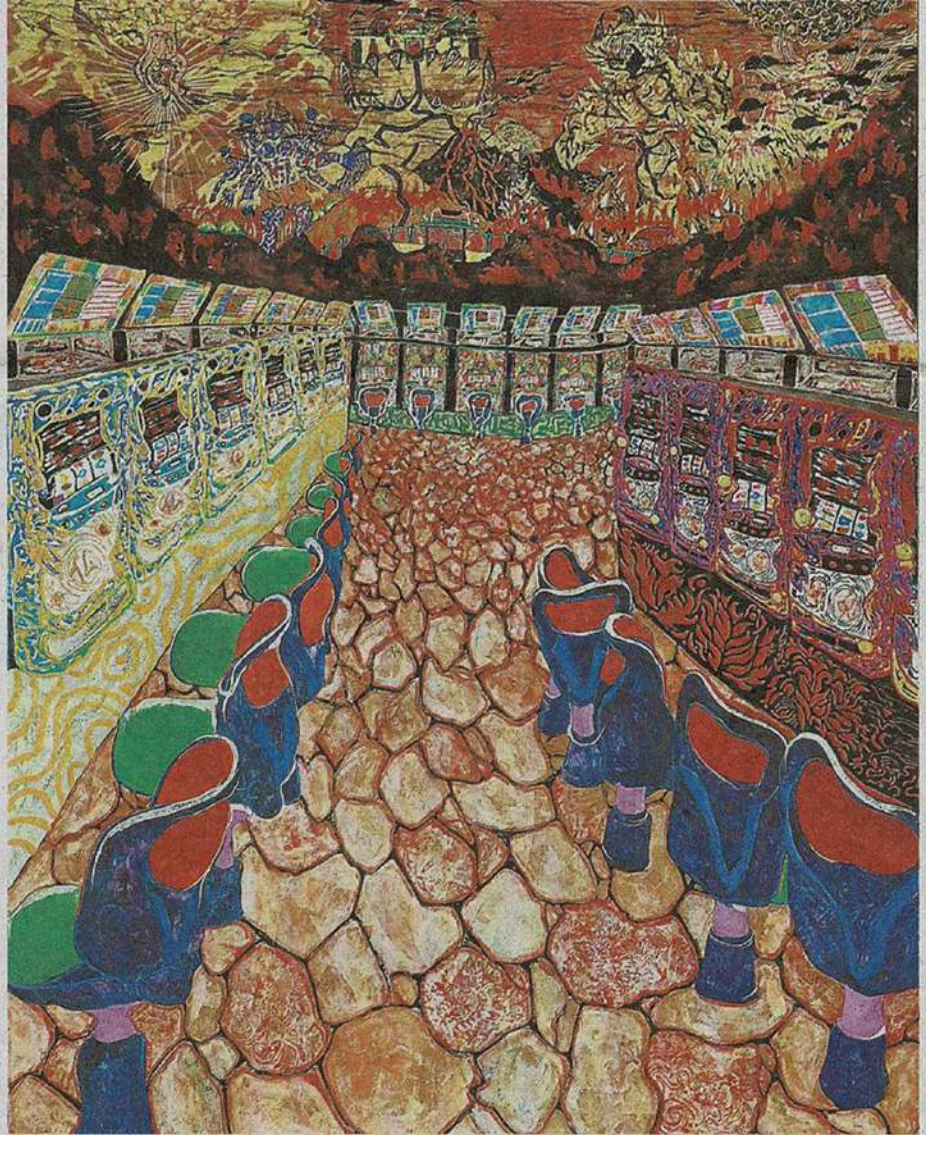
くまもと「描く力」2022

熊日大賞に嶋田さん（崇城大4年）

熊本日日新聞社の美術公募展「くまもと『描く力』2022」で、グランプリ部門の最高賞・熊日大賞に、熊本市中央区の崇城大4年、嶋田龍栄さん(22)の日本画「六文銭CHANCE」が選ばれた。

【3面に関連記事】



熊日大賞に選ばれた嶋田龍栄さんの「六文銭CHANCE」

「描く力」熊日大賞 嶋田さん

「自由な筆致で迫力」

熊本日日新聞社の美術公募展「くまもと『描く力』2022」（特別協力・崇城大）の審査が8日、熊本市中央区の熊日本社であり、グランプリ部門の最高賞・熊日大賞に崇城大4年の嶋田龍栄さん(22)＝同区＝の日本画「六文銭CHANCE」を選んだ。大学生のグランプリ受賞は初めて。愛好者向けのふるさと部門最上位のふるさと賞は、小﨑春一さん(83)＝同区＝の水彩「帰り路」に決まった。

【1面参照】

嶋田さんの作品は、スロット台が並ぶ空間と地獄の光景を組み合わせて描いた100号。審査員からは「現代的なモチーフと、宗教画のような古典的なイメージがうまく一つにまとまっている」「自由な筆致で迫力があり、描きたいという欲望があふれている。日本画の可能性を感じる」と高く評価された。

小﨑さんは、故郷の玉名市から望む有明海の干潟と長洲町の造船工場を50号に描いた。「雄大な自然の中に小さく人物を描く構図に安定感がある」「横の線の重なりが空気の厚みを感じさせ、緻密に練り上げられている」と評価された。

審査員は後小路雅弘（北九州市立美術館長）、野地耕一郎（泉屋博古館東京館長）、日比野克彦（熊本市現代美術館長）、鷲田めるろ（十和田市現代美術館長）の4氏。両部門に221人から平面作品266点が寄せられ、入賞・入選計89点を決めた。

9日は熊本市西区の崇城大芸術学部で、高校生向けのチャレンジ部門の審査がある。

3部門の入賞作品と審査員評は後日、熊日朝刊に掲載。作品展は11月29日～12月4日、熊本市中央区の県立美術館分館で開催する。

（前田晃志）

人ひと

「描く力」熊日大賞に選ばれた 嶋田龍栄さん

スロット台が並ぶ空間は、どこかまがまがしい雰囲気が漂う。その向こうに広がるのは極彩色の地獄。スロットでどんな"地獄"を見たのかと尋ねると、「たしなむ程度です」と照れくさそうに笑う。

受賞作「六文銭CHANCE」は、「地獄の沙汰も金次第」という言葉に着想を得たという。「黄泉の国の手前にあるスロット台で、さんずの川の渡し賃『六文銭』を増やせないかなあと思ったんです」。岩絵の具など日本画の顔料を使い、金色を何度も重ねて死後の世界を表現した。

中学、高校時代は柔道中心の生活で、絵を本格的に学び始めたのは崇城大芸術学部に入ってから。周りは美術科出身の同級生も多く、自身の作品と比べてしまうことも。心のどこかにいつも悔しさと自信のなさがあり、これまで公募展に応募できなかった。

卒業を前に「最後の力試し」と思い切って応募したのが、今回の「描く力」だった。初めての応募でのグランプリ受賞に、「本当に信じられない」と何度も繰り返す。

「描きたいものを詰め込んだ作品が評価されたのはうれしいのですが、まぐれかなという気持ちも正直あって。もっと勉強したいのが本音です」と謙虚に語る。郵便局への就職が決まっており、切手をデザインするのが将来の夢だ。

熊本市内で家族と5人暮らし。22歳。（澤本麻里子）